

★漢方あれこれ★

◆金元四大家についてⅠ◆

劉 完素 寒涼派の重鎮

太田 順康

生年1110年以降、没年は1200年以降といわれ生没年とも明らかではない。南宋の頃金の領内の河北省河間県の住人だったので、劉河間と呼ばれていました。

宋(960～1279)の時代になって、五運(木、火、土、金、水)と六氣(風、寒、暑、湿、燥、火)を重視する運氣学説が医学にも取り入れられるようになり、病氣の原因に内因(臟腑の弱り)外因(六氣の外邪)があると云う学説が確立してきました。劉完素もこの五運六氣の学説について研究しそれを臨床に結びつけて治療に当たったと云われています。

彼は六氣の内「暑」と「火」は一つになると考え身体の中に陽氣が多く溜ると「暑火」が燃え上がって病氣になると考え、この火熱が病氣の原因とみて「火熱論」を唱えて寒涼剤を多く使い病氣を治療しました。№15の黄連解毒湯などがその代表薬です。勿論お腹が冷えて起きる下痢には温める辛熱剤も用いています。ただ彼の周りの患者さんにこの陽氣の多さが災いになっている人が多かったのでしょうか。冬の間には外の寒さに抵抗するために陽氣を身体の中に貯め込んでいたのを、春になって外の陽氣が戻ってくると身体の中の陽氣が邪魔になるので春先に苦味のある山菜を食べると同じです。彼は沢山の書物を残しています。

「素問玄機原病式」「素問要旨論」「宣明論」「傷寒直各」などが有名で、私たちの後世の初学の者の勉強の指針になっています。

張 從正 攻下派と云われていた。

字名は子和、1156年～1228年頃の人、劉河間と同じように南宋の頃金の領内の河南省の住人です。

劉從益の門で遊学し医術に精通して河南省では結構有名な人だったようです。南宋の金王朝の宣宗の時代には大医院の職にあったようです。彼は劉河間の説による「風・寒・暑・湿・燥・火」などの天の邪や、「霧・露・雨雷・氷・泥」などの地の邪は人を病気にしやすいと考え、また「酸・苦・甘・辛・鹹・淡」などの水穀の邪の飲食も病氣の原因になると考えた。

これらの邪が体内に入ると病氣になりすぐに外へ追い出し体内に留めないことを治療の方針とした。

身体の表面、皮膚や経絡にある風寒の邪は発汗により追い出し、風熱や宿食などの横膈膜の辺りや胃の上部にある邪は吐かせて追い出し、熱や固冷がお臍より下の下焦に有る時は下剤をかけてこれを追い出すと良いという説です。汗吐下



お知らせ

すやか教室 山歩き

曜日と時間：毎週金曜日 10:30～

★雨のときは、中止します。

★お茶など飲み物を持参

<11月の予定>

木々の葉が紅葉し、きれいになってきました。季節の移り変わりを感じます。でも山肌はこの雨で荒れ、例年になく道に石や土・折れた枝などが落ちてきています。急斜面の木がしっかりと掴んでいた土が落ちて、ほっかりと空いた穴。自然の力と昔の人たちが山とつき合い守ってきたその営みをあらためて考えさせられます。

§ 漢方相談日

(担当 太田順康：日本漢方交流会認定漢方終身師範。
岐阜県漢方研究会会長、岐阜薬科大学「漢方学」講師)
今月の漢方相談日は、下記のとおりです。

12日(木) 16日(月) 30日(月)

§ 11月の休診日

2日(月) 5日(木) 6日(金)

§ 健康診査予定

ぜひこの機会に健診を受けましょう。お手元の受診券をご持参の上、お越しください。
1940(昭和15)年11月1日～1976(昭和51)年3月31日生まれの方の特定健康診査は終了しました。

◎ぎふ・すやか健康診査：

9月1日～11月30日

<対象者>

- ・後期高齢者医療制度に加入の岐阜市民の方
- ・自己負担金：500円

を駆使したので攻下派と云われたのです。勿論攻めることの出来ない虚弱な人には補剤も使っていました。「儒門事親」と云う書物を残しています。
№61 防風通聖散などがその代表処方です。
この時代の金の領内にはこの二人のように強い薬を使って治す患者が多かったようです。(つづく)